
twins

津辻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t W i n s

【Nコード】

N 7 4 4 9 P

【作者名】

津辻

【あらすじ】

「俺たちは、出逢うべくして出逢ったんだ」

高校1年生。俺たちの普通なようで普通じゃない人生が変わった。俺たちが、出逢ったことで。

幽霊の声が聞こえる少年・明と、幽霊の姿が見える少年・黎の、2人の出会いは運命で、そしてたくさんの時が動き出して。

Act 1 : Akira

視えないものが見える。

そう聞くとあなたは何を想像しますか？
物ですか？
生き物ですか？

それとも

少年は歩いてきた。

誰もいない校舎の廊下 正確には今の時間、誰も使用していない高校の廊下を。

黒髪に眼鏡。よく見ると整った顔立ちと、チャームポイントになるはずの右目下の泣き黒子。しかし、顔の半分まで隠す長い前髪がそれらを邪魔している。着崩していない制服姿は真面目な生徒そのものであり、授業中である今の時間に廊下を歩いているということ
は、よほどの理由が無い限りあり得ないだろう。

細身の体格を引き摺るように歩く少年の姿は、いかにも体調不良者であり、ほとんど日に焼けていない白い顔を更に青白くさせてフラフラと歩く。

少年の名は、葛城明。

今年、高校に入学したばかりの1年生である。

彼には、あり特殊な能力が備わっている。そして、同時にそれは彼にとつて重大な悩みの種類になっている。

くそっ、なんで僕がこんな目に遭わなければならなんだ！

静まりかえった廊下を1人、心の中で悪態を吐いた明は目的地である保健室を目指す。

階段を降り始めたときだった。

『お兄ちゃん……』

耳元で囁かれたようなそれは、幼い少女の声だった。

母親と2人暮らして妹などいない明にとっては無縁の呼称である。しかも、ここは高校。幼い少女などいるはずがない。のだが、

明は溜め息を吐いて口を開く。

「まだいたのか……。いい加減、成仏してくれよ……」

ずしりと重くなる肩。先程より激しくなる頭痛。

見えないけど聞こえる声。

それらは全て明の持っている特殊な能力が原因である。

『靈感』、と一言で言ってしまうえば容易だが、明の場合は中途半端な靈感である。

つまり、聞こえていても見えないのだ。

どつという訳か、明には物心つく前から幽霊の声のみが聞こえ、下手をするとそのまま付きまとわれるまでに至る。

最近、声がしないから逝ったかと思っただのに　　なんだよ、何が心残りで僕に付きまとうんだ。

流石に学校の廊下で幽霊と会話しているところを目撃されては後々、変人扱いされるに決まっている　　いや、明が知る限り、誰にも靈感が備わっていないのだから、端から見ると、独り言をぶつぶつという奇妙な生徒にしか見えないのであろう。

重い身体と頭痛に耐えつつ、明は足を進める。

保健室。

ガラガラと立て付けの悪い扉を開け、中にいる保健医に声をかけ

たところ、明は笑顔で出迎えられた。

「あら、葛城君。今日も来たの？」

大学を出たばかりらしいその保健医は、4月の入学式以来頻繁に世話になっている。

若くて美人の保健医の介抱。男子生徒にとってはこの上ない幸せに至るはずなのだが、人付き合いが苦手な明にとっては苦痛でしかない。

「……すみません。頭痛が酷くて」

「良いわよ。そのベッドが空いているから、使って」

「……ありがとうございます」

それだけ言うのが精一杯というように、明はフラフラとベッドまで行く。上履きを脱ぎ、布団に潜り込んで息を吐いたところ、保健医が呆れ声で言った。

「あー。一応、ちゃんと熱計って」

「……はい」

ゆるゆると体温計を受け取り、脇に入れる。暫くして計測完了の電子音が鳴り、体温計を渡す。

「うーん。やっぱり熱ないわね。いつものことだけど」

そりゃ、風邪じゃないのだから当然だろう。

頭痛の原因が幽霊だとは流石に言えないので、たいてい、寝不足や偏頭痛など、適当な理由を告げている。

「1時間寝れば直るので、気にしないでください」

頼むから詮索しないでくれ。

保険医の話しかける言葉に邪魔臭さを感じる。

ついでに、視界を黒い暖簾のように遮っている前髪にもそれと同じ物を感じ、眼鏡を外し、前髪を軽く手で払う。

「葛城君って、意外とモテるでしょ」

髪を払った瞬間、保健医が悪戯が成功したような顔でそう尋ねてきた。

「……いえ、全く。何処をどう見たらそう言えるんですか」

明は呆れた様に溜め息を吐いていった。あいにく、今まで生きてきた15年間と彼女いない暦は同等である。ましてや、告白されたことも、したこともない。

中学の頃から好きな女子はいた。

クラスも一緒だった。

中学で1番人気だったその子は、中学卒業同時に同じ学年の男子と付き合いだした。

想いなんて伝えられなかった。

誰かに拒絶されるのが怖かった。

結局、自分はたんなる臆病者なのだ。何に関しても……。

だからこそ、明は周囲に能力のことは言わない。

そして、事実を知られて大切な物を失ってしまうより、初めからない方が良いと思うから、他人を拒絶する。

「嘘でしょ？ 葛城くん、眼鏡取って髪切ったら格好良くなると思うわよ」

クスクスと笑う保健医は23歳というのにまだ高校生のような雰囲気であった。

「ね、だから髪切ってみたら？」

「……遠慮させて頂きます」

そう言っつて話を遮るように明は布団に潜り込んだ。

授業終了のチャイムが鳴った。

だるい体を無理矢理起こす。

やっぱり頭痛なのは変わらない、か……。

頭が、重い。これを取り除くには今自分に憑いている幽霊おんなのいを引き離さないといけない。

それは十分に分かっている。しかし、簡単には離す事はできない。

『聞こえる』と自覚し、それが自分にとって悪影響を及ぼすと理解てからというものの、どうにかして引き離そうと何度も試みた。

しかし、今までで一番有効だったのは彼らの『願い』を聞いてあげることだった。どうやら、彼らは『この世』に心残りがあって『あの世』に行けないらしい。だから、声を聞くことができる明に願いを聞いてもらおうと付きまとう。

そして、明は平穏な生活を送る為には彼らの『願い』を叶えるしかないのだ。

さて、どうしようか。

溜め息を吐き、ベッドから降りようとした時だった。

「失礼しまーす！」

立て付けの悪い扉を開けて誰かが室内に入ってきた。

どこかで聞き覚えのある声。入ってきたのは男子生徒のようだ。

「体育で怪我しちゃったんで消毒とガーゼ良いですか？」

もうしばらく寝ている振りをしようか、と思った。知り合いだったら話し掛けられそうだ。

しかし、男子生徒の方がそれを妨げた。

「あ、葛城、来てますよね？」

自分の名前を出されてドキリと心臓が跳ねる。

「ええ、来ているわよ。そのベッド」

ああ……逃げ場を失った……。

素直に答えてしまう保健医を少し恨めしく思っていると、仕切りのカーテンが揺れて男子生徒が顔を出した。

「よっ、大丈夫か？」

につこりと人懐っこい笑顔。整った顔立ちに、右目下の泣き黒子。綺麗に染め上げられた茶髪をワックスで跳ねさせた無造作ヘアー。

「東藤黎か」

溜め息と共に吐き出した言葉に黎は困った顔をする。

「なんだよ。溜め息吐くなよ」

「……何の用だ」

軽く睨み付け、聞く。

「なにつて、葛城の様子を見に来たんだよ」

明が睨み付けたにもかかわらず、黎は怯むことなく笑顔で答えた。
「確かにクラスは一緒だけど、様子を見に来てもらうほど仲良くはない」

黎とは対照的に明は不機嫌な顔で答える。

はつきり言つて、二人は対照的である。明はインドア派で常に不機嫌そうな顔、おまけに人付き合いが苦手ということがあるため、特に親しい友達は居ない。

逆に黎は明るくて誰にでも好意を持って接する、所謂人気者というやつで、男女共に人気がある。黎にとっては明と接することはどうつてことないが、明にとっては黎のような奴は最も苦手な相手である。

再度黎を睨み付け、ベッドから降り、カーテンで仕切られた空間から出る。

「あら、大丈夫？」

「はい、ありがとうございます」

笑顔で聞いてきた保健医に淡々と答え、足早に保健室を出る。何故だか分からないが、早くこの場から離れたかった。

「葛城ー？ ちょっと待てよ！」

後ろで黎が呼び止めたが、それを無視し、遮るように保健室の扉を閉めた。

Act 2 : Rei

頭が、重い……。

保健室で仮眠を取ったのは全くの無駄だったようだ。

三時限目を保健室で過ごし、四時限目から授業に出ていた明は後悔した。

こんなことだったら、わざわざあんな保健医がいる保健室に行かなければ良かった。

昼休み後の二時間を気力でやり過ごした明は、やっとの思いで帰り支度を整え昇降口を出た。

しかし、明が向かったのは学校の敷地の外ではなく、学校の裏庭。大きな広葉樹に寄りかかり、明は口を開いた。

「あの、来たんですけど」

辺りを見回しても誰も居ないように見えるが、明の口調はまるで近くに誰かが潜んでいるかのようだ。

「出てこないなら、僕帰りますよ?」

挑発するような口調で明がそう言った時だった。

『 っ待って! 』

同年代の少女の叫びに近い声で引き留められた。

やっときたか。

溜め息を吐いて広葉樹に寄りかかり直すと明は視線を辺りに巡らせた。

確認しているということは、周囲に自分以外の生徒が居ないかと

いうことと、さっき自分を引き留めた彼女が何処にいるかということである。

しかし、前者は確認できても、後者は確認できなかった。やっぱり見えない、か……。

明はそんな思いと共に溜め息を吐く。

周囲には、視覚的には誰も居なかった。もちろん、引き留めた彼女も。彼女がどこかに隠れているわけではない。

彼女が『見えない』のだ。

『ごめんなさい。本当に話を聞いてくれるとは、思わなくて……』話し掛けるのを迷ったため声が出せなかったのだろう。声が意外に近くで聞こえた。しかし、どんなに近くに存在しても明には見ることが出来ない。

「そうですね。僕も幽霊であるあなたの話を聞くことになるとは思いませんでした」

そう。彼女は幽霊なのだ。だからこそ、明しか彼女の話を聞くことは出来ない。

『……どうして?』

「え?」

『どうして、あなたは私の話を聞いてくれるの?』

彼女の質問に少し戸惑う。どうして、と問いかけられても、今まで自分に話し掛けてきた幽霊達の話聞いて当たり前のように送り出してきたのだ。

だから、今更理由など無い。

有るとすれば

「……あなたが僕に泣きついてきたからじゃないですか」

「見つけ」

急に意識が現実に戻された感じがした。死角から誰かの声が聞こえて警戒する。

「！誰だっ！」

見つかった。さっきまでは誰も居なかった筈なのに。

自分の深くとさつき彼女と話していた内容（靈感の無いものが聞けば独り言）が聞かれてはいないかという不安でパニックになる。

それでも、何とかして誤魔化すか、バレてしまったら口止めをしようと思ひ、樹の向こう側に回ると、知っている顔が居た。

「つよ」

「東藤 黎……」

怒り混じりの明の声にも動じることはなく、黎はニコニコと話し始めた。

「いやー、帰ろうと思ったなら明の声が聞こえてついつい立ち聞きしちゃってさ。悪い」

「……」

「あ、俺の事は呼び捨てで良いから！俺も明って呼ぶからさ！」
空気を読めているのか、読めていないのか。黎の口は止まることがないと思えた。

「……なあ、」

しかし、急に声色が真剣になり、思わず黎の顔を見た。黎の眼は真剣で、思わずたじろぐ。

「明が話していたのって、あの人……？」

「?!」

誰も居ない空間を黎は指差す。

「つよ!?」

どうやら彼女も驚いているらしく、息を飲む音がした。

「東藤……お前、何が言いたいんだ？」

こいつ、彼女が見えているのか？

明は疑心の眼で睨むが、黎はお構いなしに頬を緩めた。

「彼女が見えるって言いたいんだけど？」

「普通は信じないだろ」

平生を装って答える。心臓がバクバクと音を立てていたが必死に抑えた。

「……だけど、明は信じるんだろう？」

「……っ」

平生を装っていたのが思わず崩れた。

信じないと言えば嘘になる。実際、明には幽霊の音が聞こえるのだから。

「……ねえ。あなた、本当に、私が見えるの？」

彼女が恐る恐る黎に尋ねる。

「なあ、どうしたんだよ？ 幽霊の存在を信じないのか……明がさつきまで話していた彼女は本当に存在するのか、しないのか……」
しかし、黎は明から目を逸らさず口を開いた。

まるで、彼女の声が聞こえないとばかりに。

「……お前は、どうなんだよ」

「俺は、信じるよ。彼女も存在すると思ってる」
即答だった。

真っ直ぐ自分を見る黎の視線が嫌で、明は目を逸らした。

「……」

「……じゃあ、どうして」

彼女が呟いた言葉は聞き取りにくく、意識が耳に集中した。

『どうして、私が話しかけたときに返事をしてくれなかったの？』

「？」

明は耳を疑った。彼女が何人もの生徒に助けを求めるように話しかけていたことは知っていた。しかし、黎にも話しかけていた上に、黎がそれに答えなかったとはどういう事なのだろう。

「東藤、どういうことなんだよ」

「え？ なに？」

「聞こえなかったのかよ」

何かがおかしい。

明は直感で悟る。彼女の声はそこまで聞き取りづらいわけではなかったはずだ。だとしたら、どうしてさっきから黎は彼女の言葉に反応しない？

回答を待つように黎の顔を凝視する。黎は困ったように眉を顰めた。

「もしかして、さっきからあの人、喋ってた？」

「はあ?! 喋るところかお前に尋ねていたんだぞ?!」

何を言い出すんだこいつは。

もう、訳が分からなくなってきた。それはまるで 『見えるけど、聞こえない』 みたいじゃないか。

こいつは……、東藤は、何者なんだ……？

疑心が強くなった明を前にして黎は、困ったように眉を下げ、右手を頭の後ろに持っていった。

「あー、そうだ、明は知らないんだよな」

知らない？

続きを促すように明が視線を向けると、黎は、ふっと横を つまみ、彼女の方を向いて頭を下げた。

「ごめんなさい。俺、君の姿は見えるけど、話している声が聞こえないんだ」

さっきから微妙に話が噛み合わないのはそういう訳なのか。ずっと思考の殆どを占めていた疑問が消え、少しずつ余裕が生まれる。頭を上げた黎は明の方に向き直った。

「そーゆーこと」

二カツと明るく笑った黎。

『そうなんだ……』

ほっ、と息を吐いた音がした。どうやら彼女の動揺は治まったら

しい。

「分かってくれた？」

黎はどうやら明と彼女の両方に問うてるらしい。

これなら、明の能力について不用意に言いふらす事は無いだろう。

「ああ」

安心した明は声に出して答え、彼女は黎が視線を向けた時に行動で答えた(らしい)。黎は嬉しさと安心が混ざったような和かな表情を彼女に向けていた。

「良かったー……、いつまでもそんな目で睨まれてるのは心が痛いからさ　これで、頼める」

「頼む？」

疑問が消えたと思ったら次から次へとまた出てくる。明はまた顔に疑心を浮かべた。

「あー、でも後で良いや。どうせこれから長い付き合いになりそうだし」

「はあ!？」

「だから、その前にあの人の話を聞いてあげなきゃだね」

急に話を方向転換させた黎に戸惑いを隠せなかった。

自分から疑問を浮き上がらせておいて何様のつもりだ。しかも、長い付き合いになる？

そもそも明は、こんな掴み所がなくて存在しているだけでも目立つ奴とは付き合いたくない性分だ。

それなのに、黎は勝手にそれを決め、更には彼女の話の聞くと云っている。彼女の声が聞こえないのに、だ。

急に怒りがふつつつと湧いてきて手が震える。

『わ、……私は良いから……あなたの……って聞こえないんだ、よ、ね……』

彼女は焦ったようにつつかえながら、自分を後回しにするように促してきた。が、それすらも明の怒りを増幅させる要因の一つになっていた。

「と言っても、俺にはあの人の声は聞こえないから、明に聞いてもらうしか出来ないけどね」

あはは、と笑った黎。

やっぱり、結局は人任せではないか。

明はとうとう堪えきれなくなった怒りを吐き出した。

「っざけんなよ！ 僕はお前と何の関係もないし、長い付き合いにするつもりもないっ！ だいたい、彼女の話聞くつもりでここにいるのに、どうしてお前の頼みも聞かなきゃならないんだ!？」

一気に捲し立てるように言ったため息が上がる。

黎は驚いた顔をしたが、それは一瞬で、すぐに真剣な顔になった。「明にしか、頼めない事なんだ。だから、明は引き受けてくれるはず」

決めつけるようにキツパリ言い切った黎。

「決めつけるなよっ！ 出会って間もない奴なのに、どうしてそう言い切れるんだよっ!？」

「さあ、何となく、かな？」

「っ」

だったらどうして僕なんだ。

怒りに燃えた目を黎に向ける。が、黎と目が合った途端にその怒りが消えていく。

何なんだよ。

自分の感情なのに、分からない。怖くなった明はくるりと踵を返した。

「あ、明！」

黎が呼び止める声に振り向きもせず明は走り出した。

校門を出て足を止めた。運動が苦手な事と体力の無さが影響して、息がすぐ上がってしまう。荒い息をしながら後ろから黎が追いかける。

て来ないか不安になって振り向いたが、誰も追いかけて来ることは無かった。

誰も居ない。その安心と走り疲れたのとでそれ以上足が動かなかった。

学校の敷地を囲っているフェンスに寄りかかり、座り込む。

感情を爆発させたことなんて今まで無かった。そんなことをすると自分の心の枷が外れてコントロールできなくなりそうだったから。だけど、さっき自分は黎に対して感情を爆発させた。しかも

「……っ何なんだよ……あいつの瞳……」

あの時、視線が合った途端に怒りが収まっていった。

明を見る黎の瞳は優しく、一瞬、考えてしまった。東藤なら、感情をさらけ出しても

「……馬鹿みたいだ……僕は、まだ求めているのか……？」

自分を理解してくれる。そんな存在を。

目覚まし時計が鳴った。いつもより、一時間ほど早い起床。手探りで音を止め、欠伸をしながら起きる。眼鏡を掛け、ベッドから降りて伸びをする。よし、目が覚めた。

Yシャツと灰色のズボンを手慣れた様子で着て、ベルトとネクタイを締める。壁に提げてある紺色の上着と鞆を手に持った明は、自分の部屋を出てリビングに向かった。

「おはよう、母さん」

キッチンに居る母親ににそう声をかけると母親は驚いた顔をして振り向いた。

「おはよう、明」

にっこりと笑った母親 葛城さくら。明はさくらと二人暮らしである。父親は明が幼い頃に離婚した為、不在である。

もうすぐ四十歳の筈なのに皺ひとつ無い顔であり、小柄で細い身体のおさくらは一般的に言う美人である。

「今日は早いよね。何か用事？」

テーブルに朝食のパンと目玉焼き、サラダを置きながらさくらは尋ねた。

「……今日は、ちよつとね」

明は誤魔化すように言葉を濁し、席に着いた。その様子を見てさくらは心配そうに顔を歪めた。

「悩み事？」

明の真正面の席に着いたさくらは黙々と朝食を食べる明を見つめる。

「いや、ちよつと……」

流石に母親の心配する顔に堪えかねた明は朝食を食べる手を止め、

渋々理由を言った。

「……クラスメートに会いたく無いんだよ……」

ぼそつと呟いてまた食べ始める。しかし、さくらは聞き逃さなかつたらしく嬉しそうに微笑んだ。

「あら、お友達ができたの？」

「!？」

思いがけない返答に明は噎せる。咳き込みながら明は否定した。

「ち、違うつ！……っあいつは、友達じゃない！」

「そうなの？ 明がクラスの子の話をするなんて最近無かったから、てつきりお友達ができたのかと思ったわ」

「……………」

くすくすと笑うさくら。明はそれを見て言い返す気力が失せたのか、黙って食事を片付け「いってきます」と家を出た。

明の家は八階建てのマンションの五階にある。エレベーターで下まで降りて、徒歩十五分程離れた学校へ向かう。

いつもより早く家を出たため、早く登校することができた。

朝の学校は人が疎らで静かだ。明は普段の騒がしい学校よりこっちの方が好きだった。

明は校舎には入らず、まっすぐ裏庭に向かった。目的は、二つ。昨日話を聞き逃した彼女と話すことと、東藤黎に会わないようにするためだった。

しかし、あるうことが、二つ目の目的は裏庭に着いた途端に無駄に終わった。

裏庭の大きな広葉樹。昨日、明が黎に怒鳴った場所。その幹に寄

り掛かりながら体育座りで腰を降ろしている黎がいた。

黎は前を向いて笑っていたが、明が近づいて来たのに気付いて横を向いた。

「よっ、おはよっ」

片手を低く上げて挨拶をした黎に、明はあからさまに嫌そうな顔をした。

「東藤……どうしてお前がここにいる？」

「どうしてって、明を待っていたんだよ」

「……」

待っていた？ どうして？

「そんなに嫌そうな顔すんなよ。昨日の事も謝りたかったし、ユリさんの話を聞いてあげたかっただけなんだから」

ユリさんとはどうやら昨日の彼女の名前らしい。

「……声が聞こえないの、か？」

「そうだよ。それでも頑張って名前までは聞き出したんだから」
黎は口を尖らせてそう言って足元を指差した。そこには黎から見
て逆さに五十音と数字が書かれていた。

「なんだ、これ？」

「これでユリさんに指差してもらって話すんだよ。時間かかったよー。俺が理解しないと次に進めなくてさ。明が来てくれて、助かった！」

そう言っつてニカツと笑った黎。その笑顔につられてか、明は思わず謝罪を口にした。

「あ、……昨日は、急に怒って悪かった」

黎はそれを聞いて驚いた顔をして固まっていたが、すぐに笑顔で言った。

「いいよ、気にしてない」

明は内心ほつとしていた。昨日の事で黎に対してどこかしら後ろめたさがあったからだ。心のわだかまりが消え、明は黎に聞いた。

「ところで、あの人　ユリさんはいるのか？」

『うん。おはよう』

問いかけたらすぐに彼女は返事をした。どうやら近くで自分達の会話を聞いていたらしい。彼女が返答したのが分からない黎は彼女がいるであろう方を指差して言った。

「え、そこに居るじゃん。見えないの？」

その時、ハッと気付く。黎は明が彼女の事を見ることができないと知らないのだ。

「ああ、見えない」

「え……？ どういう、意味？」

戸惑いを隠せないまま黎は固まってしまつた。

「そのままの意味だ。東藤にユリさんの声が聞こえないように、僕にはユリさんの姿が見えない」

意味、分かるよな？

そんな視線を向けると、黎は納得した顔で軽く頷く。

「なつとく。どうりで見ただけじゃあユリさんが居るかどうか判断できないわけだ」

「理解できたか。で、東藤はどこまでユリさんと話を？」

改めて本題に入ろうと思い、黎に尋ねる。

「えーと、彼女はムラカミユリさん……」

「で？」

急に口籠った黎を促すように明は言ったはずだったが、黎はさらにもごもごと聞き取りづらいような声で言った。

「だけ……」

「……はあ！？」

返された言葉をすぐに理解できなかった明は反応が遅くなってしまった。一方、黎は自棄になつたらしくさつきよりも大きな声で言い返した。

「だ、か、らっ！ まだ名前しか聞いてないんだよ！ だいたい、これを使って会話しようって思い付くのに時間掛かったんだからしょうがないじゃん！」

黎はそう言うといじけたように顔を背けた。

声が聞こえない、それだけでとても不便でだ。だけど、東藤はそれを補えるように努力したんだ。

ある意味納得した明は体の力を抜くように息を吐いた。

「そうだな、頑張ったのは認める。これからユリさんと話すから暫く黙ってるよ」

それを聞いた黎は神妙な顔で頷いた。

「じゃあ、ユリさん、話してもらえますか？」

そして、明はユリとの会話を始めた。

Act 4 : Kaede

とりあえず、座ろう。

話が長くなることを想定した明はユリに話を促して腰を降ろした。少し湿った地面が気になったが、疲れるよりマシだと思い、膝を抱えて座る。隣で黎も腰を降ろして胡座をかいた。

明達が腰を降ろしたのを見計らって、ユリは口を開いた。

『本当に、いいの……？』

その声は明らかに戸惑っている。

「まあ、僕にできることなら、協力しますから。そもそも……あなたがここに留まっているのは何か心残りがあるんじゃないんですか？」

できるだけ優しい声で明は言った。それを聞いたユリは言葉を自分も確かめるようにゆっくり語り出した。

『私には、年子の妹がいるの。カエデっていう名前の。私たちは自分でいうのも変だけど、本当に仲が良かったの。でも……躊躇うように口を閉ざしたユリ。しかし、明は急かさなかった。

彼女がこれから話すことはもしかしたら、話したくないことなのかもしれない。明は話したくないことを無理矢理聞き出すことはしなかつた。

暫くすると、ユリは深呼吸を一回して、意を決したように話し出した。

『……本当に、些細な事から始まった喧嘩だったの。最初は、私があの子の大切な硝子の小物を壊しちゃったのが原因で……。お互い意地っ張りだからすぐに仲直りができなくて……』

そこまで言ったユリはまた深呼吸をする。泣くのを抑えて声が震えながらも話しを続けた。

『……っあ、あの日っ、仲直りしようと思ってっ……っケーキ、食

べにつ……行こう、って約束したのっ……でもっ……！
そこまで話すのが精一杯だったのだろう。ユリはついに嗚咽を洩らして泣き出した。

彼女は多分、そこに向かう途中、何らかの事故で亡くなったのだろう。だから、行けなかった。

つまり、妹とは喧嘩別れになってしまったというわけだ。

「……わ、わたしっ、まだカエデにちゃんと謝ってないのっ……！
でもっ、言っても言っても、カエデには……聞こえてなくて……」

「！」
慰めなきやいけない。明はそう思うが、声を上げて泣くユリにどう声を掛けたら良いか分からなかった。自分の不甲斐なさが悔しくて視線を足元まで下げる。

姿しか見ることができない黎はユリが何故泣き出したか分からず、心配そうに眺めていた。しかし、いてもたってもいられなくなっただのか小声で明に尋ねる。

「……なあ、ユリさんどうして泣いてるんだよ」

「いいから、黙ってる」

「……分かったよ」

黎にはそう言ったが、実際、明は焦っていた。どうやったらユリが泣き止むのか、何と声を掛けたら良いのかが一色他になって頭の中でぐるぐると回っていた。

明にそう言われてふて腐れたようにしばらく黙っていた黎だったが、不意に静かに立ち上がって前に出た。そして、何も無い空間に手を伸ばして、何かを抱き寄せるような仕草をした。

「泣かないで下さい……辛いなら、話さなくても良いんですよ？」

黎が口にしたそれは、静かで優しいものであった。

明には見えないが、黎の腕の中にはユリがいるのだろう。

黎は辛そうな顔をしてユリを抱き締める。

話ができるくせに、言葉一つもかけられなかった自分は何なんだ

ろう。そう思うと、自分は何と無力なんだろう。
明は初めて黎を少し羨ましいと思った。

「それで、明は二人を仲直りさせたい、と？」

あの後、二人はユリが泣き止むまでずっと傍にいた。その後、二人は慌てて授業に向かい、今は休み時間である。

明の席の近くまで来た黎は今朝の事を聞いてそう解釈したらしい。

「実際は、仲直りしている」

ぶっきらぼうにそう答えると黎はムスツとして言い返す。

「そうだけど、ユリさんは誤解してるじゃん」

「……………」

確かに。

黎の反論に内心納得してしまい、何も言えなくなる。

そう言えば、どうして僕はこいつと今後の相談のような話をして
いるのだろう。

「おーい、あきらくん？ 戻ってこーい」

「……………意識はちゃんとある」

手を明の顔の前でひらひらと振っている黎に少々怒りを感じ睨み
付ける。

「恐いから！ 分かった！ ふざけてごめん！」

手を慌てて引つ込めた黎に溜め息を一つ吐いてまた考える。

さて、どうしようか。一番手っ取り早いのは二人が話す事だが、
そんなことは不可能である。

しかし、ユリの言葉を明たちが代弁しても、まず信じてなんても
らえるはずがないだろう。

「ところで、明はユリさんの妹さんの…………えっと、カエデさんって
誰だか分かる？」

「確か、一年生だと言っていた」

ムラカミカエデ どこかで聞いたことがある気がする。どこで

そう考え始めた矢先、始業のチャイムが鳴り、考えを中断するしか無くなってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7449p/>

twins

2011年3月22日19時55分発行